

奥州二戸天台寺

神村ふじを

今年の冬は本当に雪が少なく、雪下ろしをせずに春を迎えることができた。それでも春分が過ぎても雪が降ったりと寒い日が続き、咲き始めた福寿草に雪が降りかかり見どころもなく花は終わってしまつて、あれは子房なのだろうか、すぐさま金平糖のような実になってしまった。

今年は新天皇のご即位と改元の年となり、今までにない大型連休がやって来た。なかなかまとまって休みは取れないので、この機に岩手県二戸市の天台寺に行ってみることにした。

天台寺は、岩手県二戸市浄法寺町じょうぼうじにある天台宗の寺院で、山号は八葉山。1976（昭和51）年、平泉中尊寺貫主で作家の今東光（春聴）が住職として就任したことで知られる。

その後の1987（昭和62）年、瀬戸内寂聴が住職に就き、月1回催される法話が大人気であったが、現在は高齢と体調のこともあつて法話は行われていないと言う。

瀬戸内寂聴は、本名瀬戸内晴美。昭和の毒舌和尚今東光を師僧として中尊寺にて得度、法名春聴

の一字をもらい寂聴とした。

寂聴は、最初は修道女になろうとしたらしい。だが、乳呑み児を残して男性と逃避行したことが仇になり教会側から拒否された。それで今度は出家を志したものの、多くの寺院の拒否に遭い、1973（昭和48）年になって今東光から得度を許されたと言う。今東光和尚がいてこそ今の瀬戸内寂聴があると言っても過言ではない。

今東光と言えば、学生時代に盗み見た週刊プレーボーイに「極道辻説法」とやらを連載していた。

純情一途の学生の身でヌード写真が綴じ込んである男性週刊誌を堂々と見るのは憚られて、詳しく読み入ったことはあまりなかったが、べらんめえ口調がそのまま字面になっている印象があった。

今東光はときどきテレビにも出ていて、ツルツル頭の生臭坊主が怒ったり笑ったり、ときどき目玉をぎよろつと剥いたりしていた。

小説家であり衆議院議員、平泉中尊寺の貫主でもあつた今東光は、時にはエロ坊主と揶揄やゆされることもあり、その抜きん出た個性は強烈であつた。今東光遷化せんげというニュースが伝えられた時、あの今東光でも死ぬんだと思つたほどであつた。

寂聴自身も波乱万丈の人生を生き、そのあげくに仏門をくぐつたのは有名な話である。寂聴は東

光和尚の偉大さを何よりよく分かっていた筈である。

もう何年も前になるが、イラク戦争の後での内紛続きのなかで日本人の若い男女が拉致された事件があった。

その後無事に解放されたのだが、テレビや雑誌、新聞に至るまで非難轟々であった。時の首相小泉純一郎でさえ、「こういう危ない時期に行かないようにあれほど言ってるのに……」という怒りの論調。

だが瀬戸内寂聴は、「若者がどこにでも好きなどころに行き、好きなことをして、それでよいではないか。それが自由ということであり、若者の特権である。彼らはどうしてもそこに行きたかったのだ。行ったところに危機があったら、説教を垂れるのではなく、無条件に黙って救っていくのが国というもの役目である」と毅然と言い切った。

この辺の小気味よさが何となく今東光と重なってしまう。同じ作家同士、同じ僧籍にある身、ウマが合ったことは間違いないのだろう。

山形から北岩手まで300km強。あらかた埼玉まで届いてしまう距離であり、自宅を車で朝7時半に出たが、八戸自動車道の浄法寺インターを出る頃には午後1時を回っていた。

天台寺のある浄法寺町は2006（平成18）年に二戸市と合併し、二戸市の一部となった。

今回の旅行の目的は、天台寺という寺院自体や瀬戸内寂聴のことに触れたいと思って出掛けたの

ではなくて、国指定重要文化財の木造聖観音立像（通称、桂泉観音）を拝みたい、ご尊顔を見てみたいという一心からであった。

実は、この観音様に以前お目にかかったときがある。というのも、2015（平成27）年に「みちのくの仏像」展が東京国立博物館で開かれた。そのときに、寒河江市慈恩寺の十二神将や奥州市黒石寺の薬師如来坐像などともに展示されており、東京まで出掛けて見に行ったことがあったのだ。その桂の一木に刻まれた鈍目の美しさにすっかり惹かれてしまい、何としてももう一度お目に掛かりたいと思っていたのだ。

本堂は改修中で、庫裡と思われるところに桂泉観音が祀られていた。でも、東京で出会った観音様と少し趣が違っていた。ピンとこないのである。余りに軽いような気がして、お参りはしたものの少し気が抜けてしまった。あれっと思いつつ坊守の方が外にいらっしやっただので、気になって尋ねてみた。そうしたら、あれは仮の菩薩で本物は収蔵庫に祀ってあるとのこと。無理を言ってみせていただくことになった。久しぶりの対面に胸がわくわくする。

木造聖観音立像。桂の一木造り。その像高さ約4尺。表面の大部分に規則的な鈍目が見事に刻みである。鈍彫の菩薩像としては日本最北端のものと言われ、10世紀から11世紀頃に作られたものと推定される。120cmほどなので、それほど大きな像ではないが抜群の存在感があり、まるで田舎の幼稚園の女性園長のような趣である。

頭部と手は細かく丁寧に彫られており、胸と着衣の部分は横の縞模様がよく揃い美しい。目、眉、唇、小鼻といった顔のパーツは幾分小ぶり。それが顔つきをきりつと引き締めているように感じる。菩薩様のいいところはまだ人間臭さを残しているところであり、女性の胸懐に抱かれたような気分になる。

仮の菩薩像では気付かなかったことがあった。それは菩薩様が上半身に身に付けておられる衣(じょうほく)の折り返し部分に、本来ならば阿弥陀如来の種字しゆじである「キリーク」が墨書されているのである。

坊守の方にそのことをお聞きすると、観世音菩薩は勢至菩薩とともに阿弥陀如来の脇侍であり、本来ならば聖観世音の種字である「サ」を墨書するところだったのであるが、阿弥陀様のお伴であることを強調しなかったのだろうとのことだった。その墨書も鮮やかで妙に目が行ってしまった。

古くから天台寺の桂清水は糠部ぬかのぶ地方の霊地として崇められ、後に観音霊場として古代最北の仏教の中心地に発展した。今も奥州観音霊場の第33番打ち止めの札所である。

桂泉観音の由来となる桂清水は、今日も絶えることなく巨木の根元から渾々と湧き出ている。

余花落花坊守憂ふ寂聴尼 ふじを

参考文献…『わたしの好きな仏さまめぐり』瀬戸内寂聴（2017、マガジンハウス）